

「化学」という語に明るいイメージが戻りつつある。さらなる前進を



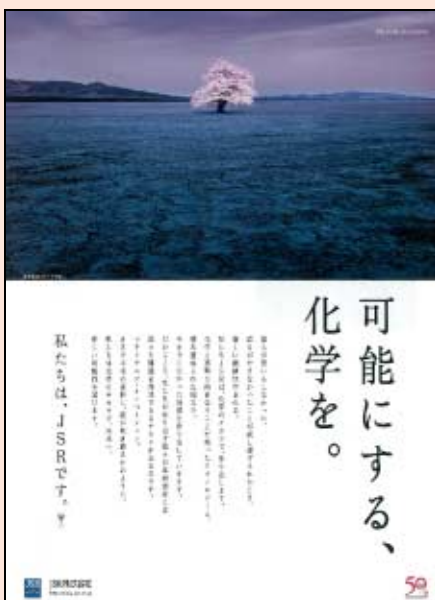
Shinji MURAI **村井眞二** 大阪大学名誉教授 (独)科学技術振興機構

はじめに

最近新聞の広告で、「化学」という語が思いもかけぬほど大きな字で書かれているのに、しばしば出会うようになった。何ともうれしいことである。新聞広告に「化学」の字が使われるというのは、一般の人々に「化学」が良いこととして受け入れられている証にほかならない。世の状況が変化したのはもちろんであるが、日本化学会の活動をはじめ諸方面での化学のイメージアップのための長年の努力が実りつつある。さらにこのことは化学にとって良いというだけではなく、物理、化学、生物などの基礎科学の歩をそろえた健全な発展のために喜ばしいことである。

約2千万円の掲載料だ。この難関を「化学」の字が首尾よくくぐりぬけ、最終的に選択されたということを見ると、「化学」の語が持つ明るいイメージを広告製作者が確信しているのがわかる。いまや、「化学」という語は人々には良いこと、ポジティブなこととして受け入れられている。

実広告を示す。三井化学のものは朝日、日経での全面広告である。JSRのものは東海道・山陽新幹線車内誌「ひととき」に毎号掲載され、同時に車内の電光ニュースでも繰り返し広告が入る。JSRやトクヤマのように社名から化学の企業とはわからないことを割りいても力強い広告である。社名のロゴマークと組みで使われることもある。BASFのThe Chemical Companyは同



新聞・テレビ広告に化学の字が増加

企業での広告製作担当者の身になって考えてみよう。当然我が社ないし製品の魅力をインパクトある形で表現したい。当然、読者の目にとまり気に入らなければならない。少しでも読者のイメージを損なう言葉は避け、読者にとって好感度最高のコピーづくりを心がける。全国紙の全面広告ともなると、たったの1回で

社の不動の思想を示すものとして有名であるが、東レのテレビにもよく出ている Innovation by Chemistry も三菱ケミカルホールディングスの Good Chemistry for Tomorrow も表現が端的だ。欲をいえば日本語でなら一層良いが。なお、ご承知の方も多いが英語の Chemistry には2つの意味があり、1つは化学、2つ目は(人と人との)相性を表す。有名な男性2人のポピュラーボーカル ケミストリーの名もここから来ている。前出の Good Chem-

istry for Tomorrow も、東亜合成の広告中のケミストリーもこの化学と相性の2つを掛けたものだ。

これらの広告の中を詳しく読んでいくと、化学と化学産業の責任、貢献が短い言葉でわかりやすく、しかも熱く語られている。そこには様々な表現で高い志が

物、デバイス、材料の分野を広く取り込んでいることである。この認識と自信を持たなければ、大きな本来の化学の役割を果たしていくことはできない。

化学に対し、次世代の社会がこれほどまでに期待している時代はかつてなかった。



語られている。今や世界の生産基地となったアジアでの製造を高度な部品・部材で支え、先導している我が国の化学産業の自負が読み取れる。

大学での「化学のイメージ」が向上

入学した後、どの学科を選ぼうかと迷う、理学部-工学部系の学生にとって「化学」という名の学科名称は、今や人気の的になってきている。例をあげる。大阪大学工学部では、化学系・生物系・物理系が合体した応用自然科学科では、学部1年生240人が2年のときに応用化学科目、応用生物工学科目、応用物理学科目、精密工学科目へ進級する。そのとき、ここ2~3年、240人中、上位から120人ほど全員が応用化学科目(定

自信を持ってさらなる前進を

言葉のイメージは、国、社会、あるいは専門家集団が持つ文化に依るものである。文化的側面を持つものは、一朝一夕に変えられるものではない。かといって自然の成り行きにまかせるのも賢明ではない。幸い「化学物質」というような矛盾した語を持つネガティブなイメージには、現在の若者は気にもかけていないようだ。一般の人々が化学という言葉に良いイメージを持つためにやはり3年連続受賞したノーベル化学賞は大きい。さらに、2010年日本での国際化学オリンピックや2010年~2011年の日本および国際化学年などのイベントを通じ、良い意味で「化学」の語が使われる機



員80人)志望である。また、東京大学工学部への進学者は、電気系の一部の学科で定員割れが続いている不人気を尻目に、工学部化学系は人気が高くなっている。ただし、本稿では「分野としての化学」の競争力については論じないが、いわゆる若者の、特に同世代の上位集団の、理系離れは相変わらず深刻な問題であることだけは指摘しておきたい。

さて、化学が非常に不人気であった一時期に各大学では競って学科名から「化学」の字を消し、物質とか材料とかの名称が増えた。そろそろ、何の学科かがわかりにくい学科名を思い切って「化学」に戻す時期であろう。このとき、重要なのは現在の化学は一昔前の化学とは領域の広さが全く異なり、応用物理、応用生

会が増える。日本化学会、日本化学工業協会はじめ、多くの団体は、化学のイメージ向上のために不断の努力を続けてきた。教育の現場での様々な活動や科学理解増進活動などが続けられた。ここに来て、その努力が実ってきたことを実感するものであり、自信を持って一層の前進をはかりたいものである。

©2008 The Chemical Society of Japan

ここに載せた論説は、日本化学会の論説委員の執筆によるもので、文責は、基本的には執筆者にあります。日本化学会では、この内容が当会にとって重要な意見として認め掲載するものです。ご意見、ご感想を下記へお寄せ下さい。論説委員会 E-mail: ronsetsu@chemistry.or.jp